

# フランス Poitou 方言について

## — Podium の発展 —

工 藤 進

Paris から 350km 南下した Poitou 地方の南仏的土壤をあげて見ると、文化史的に、はっきりと北と一線を画しているように見える。ここで、ラテン語 podium の Poitou 地方における分布と、その音声学的成因を調べて見たい。一般にフランス全土をながめると、この地名は南に多く、北に行くにしたがって少ない。pōdium の南 (Oc) 地方での普通の形、あるいは普通名詞としての形は：puòg, puèg, piòg (g = ch) である。Dordogne 地方に peuch, pech ; Gascogne 地方に puch などの形が見られる。言うまでもなく、北 (Oïl) 地方の普通の形は puy である。歴史的にこの形は、pōdiu > pōdžo > puoyyo > pueyyo > puy を説明出来ると思うが、ある意味では、galloroman の latin に一番近い poggio (italien), poyo (castillan), pueyo (léonais), puòg, puèg (occitan) と並らべても、puy のおおよその音声学的説明はできる。後で述べるが、この語については、ここでフランス語 (スペイン・レオン方言もそうであるが) の 2 重母音化とその他の語の non-diphthongaison に注目しなくてはならない。

さて、pōdium の Poitou での普通の形は、大部分が peu(pœ) であり、pou という形がわずかにある。また北の形である puy も少なくない。これは Michelin の地方別の地図でもよくわかる。その詳細な地理的分布内容はさておいて、peu の成り立ちと、それに関係して、フランス語方言の一特徴にふれてみる。pou(pu) については、pōdium を想定できないとすると、<sup>注)</sup>pūteus(puits) のこの地方での形 pou との混同から説明出来る。Landes 地方に見る地名 Le Pout も podiu ではなくして、pūteu から来たものであろう。50年ほど前の Poitiers の地誌家 Léo Fayolle は Poitou 地方の地名 Pouffond を puy de la font と解釈しているが、これも実は puits de la font の意味である (pūteofontis > pofons > pouffond ; Léo Fayolle : Notes de toponymie poitevine…)

Peu(pœ) の形については私は最近まで、Oc の形であると考えていた。つまり現在の Poitou 地方特有の l'absence de l'anticipation du yod (これは occitan にも共通のことであるが) によって、北の形である puy に peu を結びつけることはできないと考えていた。少なくとも現代の発音だけ見た場合そう考えざるをえないが、これでは古く見られる Poitou 地方の形：Willelmus de Poi (XIIs), noit, oit (< nōcte, ōcte) など、Poitou では一般に、ō+y が oi になっていることの説明がつかない。peu は poi から続いている筈である。(cf. poi/peu, noit/n[œ] = XI ~ XII 3/現代)。

しかも poi という形からは、少なくとも anticipation du yod は存在したと考えなくてはならないだろう。またやっかいなことに、poi, oit, noit などの形からは ō > q > uo, ue という二重母音化がなかったように思われるのである。しかも Poitou には古い形で、oi 以外のより啓蒙的な形は見出されていない。Peu を puèg > peuch > peu と考えた場合、最初の段階即ち puèg で当然 diphthongaison を想定している。結局 puèg, puòg > peuch > peu という変化を考えたのは間違っていたのだが、Söderhjelm や Görlich は poi, oit, noit などの形から、この方言では diphthongaison がなかったと言い切っている。

以上を図式化すると次のようになる。

	anticipation du yod	diphthongaison
Peu	Non	Oui ?
Poi	Oui	Non

実際この図式から peu を poi からの発展形と考えることは非常に難かしいように思われる。ところで次に Oc の puòg, ~~puòg~~ と Oil の puy の発展段階を追ってみると次のようになる。

	IIIs	VI ~ IX	XI ~ XIIs	XIVs	XVs	XVI s ~
Oc	pqzzo		puoy pqg > pueg puei	→		puòg puèg
Oil	pqdzō pqqyō	puoyyo pueyyō pui[pyi]	pui	puí(pwí)		pui
Poitou			poi	→		peu puy

上で二重母音化の時期が互にかなり違うことも大変重要なことであるが、Oc, Oil について [o] は共に二重母音化し、yod も働いたと考えられる (puei の存在)。

ここで考えるのは graphie *poi* の音価であるが、Poitou では、Oil の東部地方のように、*e*, *q*+*y* は diphthongaison しなかったのであろうか (cf. : lorr. *ley*, *noy* ; bourg. *noe* < *lěctu*, *nōcte* ; Bourciez, Elements …)。それとも Poitiers 大学の Jacques Pignon のいうように、≪ *q*+*yod* の場合、*q* の二重母音化は occitan の各方言、Nord-Ouest 地方、Oil 語地方の北、並びに中心部 (Poitou も含まれる) に共通のこと ≫ なのであろうか。Meyer-Lübke は Grammaire des langues romanes で、この *oi* について、≪ 二重母音が全然なかったことは考えられない。[uoi] が pré.-littéraire の時代に [oi] に縮約されたのではないだろうか ≫ と述べている。ö+y の diphthongaison という現象は、フランス語をいくつかの他のロマン語から分けている重要な要因である。もし *poi* に diphthongaison を想定しないならば、この *poi* は少なくとも l'occitanisme の範囲に入れることはできない。

Jacques Pignon は Poitou 方言について驚くべき精細な研究をしているが、その著書の中で {*u·oi*} からの方言的分離を次の図で示し、Poitou 方言については二つの仮説をたてている。

Français	u · u <sub>i</sub>	u <sub>i</sub>	u <sub>i</sub>	ui	wi
Poitou {	1 u · o <sub>i</sub>	o <sub>i</sub>		oe <sub>i</sub>	oe
	2 u · e <sub>i</sub>	ue · i	we · i	e <sub>i</sub>	e
Limousin	u · e <sub>i</sub>	ue · i	ue · i	wē <sub>i</sub>	{wē : oe}

Limousin は Poitou の南東に隣接している地方で、たしかにこの辺も peu の地名がある。Pignon は peu について二つの仮説 (poitevin, limousin) を立てている。彼の表によると、

graphie *poi* は [puoi] ではないにしろ [p<sup>w</sup>oi] というべき段階に考えられ、Meyer-Lübke の説にも合致する。

Pignon は Français, Poitou, Limonsin 三つの方言の共通段階として [u·oi] を考えているが、まったく、フランス方言の重要点はどこにある。ロマンス諸語がそれぞれ、latin vulgaire から分離するさい、母音について diphtongaison の有無は重要な識別要素であった。フランス方言の初まりは、その二重母音が三重母音化するときから始まるのである。triphthongue は diphtongue と異なり、graphie として書かれないことが多いので扱いはより面倒である。フランス全土で diphtongue の段階まで大体同様だったフランス語は triphthongaison の始まりとともに、多くの方言に分岐したと考えるのも間違いではないだろう。

triphthongue の扱いをめぐって、Oc, Oïl, Poitou を分ける好例はラテン語尾 -iacu- である。一般に Oïl では -ey- から e が落ちて -y- になるが (Neully), Poitou では -é- になる (Vouillé), Oc では普通 yod の働きがなく、-ac である (Cognac)。

フランス語の音声変化の二つの根本は、diphtongaison と yod の問題であったが、方言のそれは triphthongaison とその音声的簡略化であろう。

この歴史の段階を一步でも踏み誤ると、puits de la font が puy de la font になる。pūteu > puits について、Bourciez が pūteu > puiz(puits) と説明しているが、pūteus > pūteus または pōteus の変化にははっきりしないところがあるように私には思える。<sup>注)</sup> Fouché は pūteu > pūtsy の ū は二重の yod によって [o] と変化しなかったと述べている。とにかく puits の説明については、O. Bloch のゲルマン語の影響説など、説が分れている。ところで pūteu の Poitou 本来の形は peu であり、これが北の形の pui と混在する。これは pōdiu > poi と同じく、古くは poiz あるいは pou の形をとっている。poiz から peu への変化は pōdiu の場合と同様であろう。しかし pūteu > poiz を音声的に見ると、pūteu > pōtsy > poiz とノーマルな変化であり (cf. vōce > voix), Oc の形である yod が働かない potz と異なり、北式の音声変化である。ここでは、Bourciez のように pūteus を pūteus または pōteus に変える必要は全然ない。ともかく poiz の存在から、この語も Oïl と同様の源から、ある程度まで同じように発展したと考えられる。ところで：

Oïl        pui(puy) / puiz(puits) と  
Poitou    poi(puy) / poiz(puits)

の対立を考え、この語が共通の発展をある段階までしたことを考え合せ、対立の組合せを

pui(Oïl) / poi(Poitou)    puiz(Oïl) / poiz(Poitou)

とした場合、Poitou では前に述べたように puy と puits の地名的混同があることなども考えると、anormalな形である puiz の形の説明が、puiz に対する Poitou 地方の影響という形でなされそうである。しかしこれに対しては他の方言の場合からの反論、あるいは、pūteu > puiz の変化の方が poiz の場合よりも早かったのではないかという時間的反論があるかも知れないし、ともかくこんどは Oïl の形 puiz の成立過程を詳細に調べなければならないだろう。

Landes 地方の Le Pout または Chauvigny の近くの Pou の形は yod の働きが見られないことから Oc の形と考えてよいと思う (pūteu > pōtyo > potz > pout)。

Poitou 地方はこのように Oc-Oïl の形の識別が非常に難しく (古い形では特に Oc-Oïl の違い自体があいまいなところもある)、混在している。この方言を現象的に見るとずいぶん南の要素があるように見え、また実際あるのだが、歴史的には、Oïl の音声の歴史によりいっそう結びついているようである。

この拙論には graphie の出典、時期など明記しなかったが、あとでまとめておくつもりである。

(注)

例えば同じ XII 世紀でも、foison < fusionem には、北で foison (例、Roman de Renart) と fuison (例、Le couronnement de Louis) の二つの形がある。Bourciez は foison については latin vulgaire の fūsiōne に遡のぼらせているが、forme dialectale とも言える fuison にこの語源はあてはまらないように思える。

また XIII 世紀以前の Oïl 語では、o + y からきた oi は他の o から語と韻を踏み、e > ei > oi の oi とは異なっていた。例えば vōce > voiz は flōr > flor と韻を踏んでいる (Bourciez, §75)。ここでこれを Poitou にあてはめると poi < pōdiu と poiz < pūteu は oi の音価がそれぞれ異なるかも知れず、私の論は別の観点から考えなおさなくてはならないかも知れない。しかし Pignon はこれについて何もふれていない。もっとも Poitou の古語に韻を踏んだ例がないので音価を推定出来ないのだが、ともかくこの論をこれ以上進めるより、他の方言の場合や、古い材料、特に韻を踏む例を探すことが必要である。

( 暁星高等学校 教諭 )